

記録

「研究者家族の様々なカタチ」 単身、別居、同居：研究者カップルの選択

—日本森林学会大会における

男女共同参画ランチョンミーティング開催報告—

石崎 涼子 (いしざき りょうこ、日本森林学会男女共同参画主事)

太田 祐子 (おおた ゆうこ、日本森林学会男女共同参画理事)

1. はじめに

第124回日本森林学会大会(会場：岩手大学)において、日本森林学会と日本木材学会の共同企画として、男女共同参画ランチョンミーティング「研究者家族の様々なカタチ」が開催された(2013年3月27日12:00-13:00)。日本森林学会会員25名、日本木材学会会員16名(うち2名重複)、非会員3名を合わせて42名、お子様連れの参加者も複数あり、老若男女、様々な方に御参加いただき、盛況のうちに終わった(写真-1、2)。

今回の企画を共同で主催した日本木材



写真-1 会場の様子
(写真提供：日本木材学会)



写真-2 親子で御弁当を食べながら
(写真提供：日本木材学会)

学会は、会員数や女性比率が森林学会と比較的似ている。2012年6月現在、会員数1,733名で、うち女性は15%を占めている。2010年度より男女共同参画担当理事ならびに男女共同参画委員会が設置され、男女共同参画の促進に取り組んできた。男女共同参画委員会は、2013年度よりダイバーシティ推進委員会に改称され、より多様な立場の方々の多様な形での参画を推進する活動へと広がっている。

一方、森林学会は、2013年6月現在、会員数が2,183名で、うち女性は16%である。森林学会が男女共同参画へ向けた取り組みを開始してから約10年が経過している(図-1)。2006年から大会時に男女共同参画関連企画を開催するようになり、過去4回は主に若手研究者が抱える課題に焦点をあてた議論を行ってきた。そのなかで、研究者が抱える不安や悩みの1つとして話題にあがったのが研究者家族における距離の問題であった。今回は、開催校である岩手大学の協

力を得て、この問題に焦点をあてた議論の場を設けることとなった。

2. 研究者家族における距離の問題

森林研究に携わる職場は、数が限られているうえ全国に散らばっており、共働きの場合は、配偶者の職場と離れているため別居せざるをえないケースも少なくない。2007年に男女共同参画学協会連絡会が実施した調査によると、森林学会会員で配偶者がいる者のうち、男性で3割以上、女性では5割以上が単身赴任を経験しており、その期間も女性会員では4年以上の長期間にわたるケースが少なくなく、なかには10年以上に及ぶケースもみられる(男女共同参画ワーキンググループ、2008)。他学会等も含めた研究者全体のデータをみると、配偶者がいる女性のうち単身赴任の経験者は44%だが、その期間は2年以下の短期に集中しており(男女共同参画学協会連絡会、2008)、森林学会の女性研究者の単身赴任は、日本の研究者のなかでも特に多く、長いといえる。

単身赴任といえば、一般的には、家族で共に暮らす本拠地があるなかで、転勤により夫婦のいずれかが一定期間、家族と離れて遠方で暮らす状態を指す。だが、研究者家族のなかには、同居の期間や予定が無いまま別々に暮らさざるを得ず別居婚となるケースも少なくない。また、家族との距離の問題は、夫婦間だけではない。離れて暮らす親の介護にもある。男女問わず、仕事とともに家事、育児等を担う研究者が増えているなかで、研究と生活をどう両立させていくかは、研究者にとっての大きな課題の1つである。

- 2002 *大会時における保育室設置の開始
- 2003 *男女共同参画理事の設置
- 2004 *男女共同学協会連絡会への加盟
*男女共同参画主事の設置
- 2005 *男女共同参画WGの設置
*男女共同参画アンケート調査の実施
- 2006 *シンポジウム「男女で拓く森林のサイエンス」開催
- 2008 *緊急ランチョンミーティング!お昼だけの 討論会「若手研究者はどう生き抜くのか?」開催
- 2010 *ワークショップ「雇用不安定な若手研究者の支援のために」開催
- 2012 *ラウンドテーブル・ディスカッション「女性研究者のキャリアアップ」開催
*男女共同参画メーリングリストの設置
- 2013 *ランチョン・ミーティング「研究者家族の様々なカタチ」開催
- 2014 *100周年記念特別セッションオープン・ディスカッション開催予定

図-1 森林学会における男女共同参画活動のあゆみ

3. ランチョンミーティングの概要

ランチョンミーティングでは、まず、岩手大学の松木佐和子氏と山下梓氏より「仕事・生活、二者択一にならないための秘策とは?～『両住まい手当』を施行して2年～」と題する話題提供を、森林総合研究所の古澤仁美氏より「森林総合研究所における『研究者家族の様々なカタチ』」と題する話題提供をいただいた。

松木氏は、フィンランドの研究者家族と岩手大学の女性研究者の様子を具体的に紹介するとともに、岩手大学が遠距離カップルをサポートするためのユニークな制度、「両住まい手当」を導入したいきさつを説明した。

単身赴任という家族形態は日本独特のもので、英語では単身赴任に相当する言葉自体が存在しないと聞かすが、フィンランドの研究者はどう考えているのだろうか。松木氏がインタビューしたフィンランドの研究者カップルは、夫もしくは妻が心から望む職が得られた場合は、長期間離れて暮らすことを避けるため、たとえ海外であっても家族で移住し、配偶者はそこで可能な限り自分の望む職を探すのだという。

一方、岩手大学の大学教員の場合、女性で3割、男性で2割が夫婦別居の状態にあり、給料の多くが新幹線代に消えていくという人も多いという。女性研究者を増やそうと様々な試みがされているが、岩手大学に採用された女性研究者のなかには配偶者との別居を解消するために離職するケースが少なからずある。そこで、女性研究者の勤務継続を促すために設けられたのが「両住まい手当」である。この手当は、就業上の理由で日常的に配偶者やパートナーと住まいを別にする2カ所居住（両住まい）をせざるを得ない女性教員に対して支払われる、月額2.3万円の手当であり、岩手大学独自の制度である¹⁾。

松木報告に続く山下氏の報告では、現在は女性教員に限られている「両住まい手当」の支給対象を男性や教員以外にも広げるべきとの意見があり、議論が続いていることが報告された。

山下報告のなかで印象深かったのは、

「両住まい手当」の申請を呼びかける通知文書において、女性の配偶者＝男性という認識から「夫」という語を用いるのでは無く、同性婚も排除しない「配偶者」という語が用いられたとのエピソードであった。これまで男女共同参画の議論においては、女性の問題ばかりに焦点が当てられがちであったが、女性を含むマイノリティへの配慮という視点から捉えると、見落とされてきた点が多々あるのかもしれない。

3人目の話題提供者である古澤氏は、森林総合研究所の職員の実態や研究者家族の実例を紹介した。職員アンケートによると、配偶者がいる研究職員の子供の数は、妻が専業主婦である男性、妻が正規職員である男性、配偶者のいる女性の順に少なくなっており、配偶者のいる女性の3割は子供がいない状況だという。研究者家族の実例として、夫の育児休業、自治体のファミリー・サポート制度、電機家電など様々な手段や制度を活用して、多忙な育児期を乗り越えてきた例が紹介された。また、最後に今後の課題として、育児だけではなく、介護と仕事の両立に対する不安や問題を抱える職員が多くおり、支援体制の充実が求められていることが指摘された。

以上の話題提供の後、参加者間でのディスカッションが行われ、フロアの参加者からも、別居婚に対する思い、家族と一緒に暮らすための努力など、様々な経験談が示された。また、男性の参加者から「両住まいとなっても働きたいのか、それとも同居が良いのか、女性の本音が聴きたい」との発言があり、逆に女性参加者からも「男性の本音が聴きたい」との声もあがった。そして、いよいよ議論が白熱しそうだというところで、残念ながら時間となりミーティングを終了せざるを得なかった。十分な時間を確保できなかったことを企画担当者としてお詫びしたい。

4. 今後に向けて

今回のランチョンミーティングには、育児世代の男性参加者も多かった。ディスカッションのなかでも男性参加者から

「女性だけの問題ではなく、みんなの問題として捉えたい」とのコメントが出るなど、仕事と家庭の両立という課題が女性だけの問題では無くなっている事実が印象づけられた。男女共同参画という課題は、従来の仕事中心で生きる男性だけではなく、多様な人々が活躍できる場をどう築くかという課題であり、性別のみならず、年齢、国籍、障害の有無など様々な個々の違いや個性を尊重して、それを活かす仕組み、すなわち「ダイバーシティ」の推進へと広がる課題である。

来年4月に大宮で開催される大会では日本森林学会100周年記念事業の一環として、国際的に第一線で活躍する海外からのゲストも交えて、男女共同参画からダイバーシティの推進までを展望するオープン・ディスカッションを開催する予定である。森林におけるダイバーシティを探索してきた森林学会として、人間のダイバーシティ推進にどのように貢献していくのか。多くの皆様に御参加いただき議論できればと期待している。

注

1) 「両住まい手当」等岩手大学の取り組みの詳細は、下記URLを参照のこと。
<http://www.iwate-u.ac.jp/gender/support/support.shtml>

引用文献

男女共同参画ワーキンググループ (2008) 『『科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査』—森林学会関係者の回答を中心に—』
<http://www.forestry.jp/introduction/gender-equality/report081128.html>
男女共同参画学協会連絡会 (2008) 科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査、36-37頁
http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/2007enquete/h19enquete_report_v2.pdf